

連載

哲也製

say

心の特産品

かごしま

芋焼酎を黒シヨカで注しつ注されつというのは、オツなものだ。肴はイワシやサバなどの青物の魚が飽きが来ない。夏は木綿豆腐の冷奴に限る。

机にはりついている時は、軽羹と深蒸し茶で二服する。旅先での私のお昼は、たいていラーメン・ライスだ。漬け物とともに、これをわりわりとかきこむ。これが出来る時は、なんとなく馬力あるなあと自分に言い聞かせる。

この世には、高価でとびきりのものもあっていい。しかし、安くて美味しいもの、手頃で使い勝手のいいものもあっていい。その場その場で、あれこれ選べる。選択の中が広いこと。



それが暮らしの豊かさ、そして文化の高さだ。その土地ならではの人が、その土地ならではのものを作り、それを地ゴロもよその人も愛でる。愛でられることで、自信も誇りも、ついでにお金まで湧いてくる。地産地消というより、地産普消だ。だってそうではないか。美味しいものは、誰かに食べさせたくなる。可愛いものは、普く人に見せたくなる。いいものは、勝手に時空を超えるのだ。

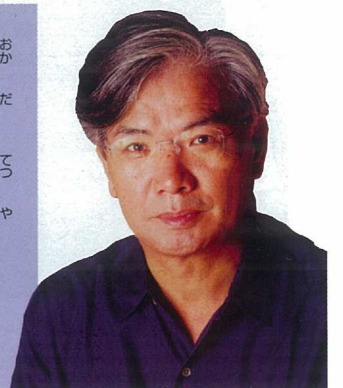
むろんその人とその土地ならではのものが、ファンを獲得するまでには、時として、とほうもない経庭を要する。作ることを売ることの間に深い溝があるように、売ることと買われることの間にも深い溝がある。すぐれた作品がそのまますぐれた商品になるほど、この世は甘くない。報われない努力だってある。

かつてそこに目をつけたのが、メディアや代理店だった。俺たちにまかせろ、俺たちが流行だってトレンドだって作る、この世のお金だって俺たちの意のままに、そう言わんばかりに自治体や企業に大攻勢をかけた。

しかしその結果、わたしたちの周囲には何が残ったか。画一化された町並みや祭、どこをとつても金太郎飴のようなヒット商品もどきだが、雨後のタケノコのように出現しただけだった。

今も私たちの周囲に目立つのは、いたずらに東京に追従するか、いたずらに東京を毛嫌にするか、いずれかの人だ。だが大切なことは、強いものにあやかるところでも、ライバルを出し抜くことでもない。

第一回 大海の一滴と井戸の一滴



おかだ てつや
岡田 哲也

1947年、出水市生まれ。東京大学中退。詩集「海の陽山の陰」「にっぽん守唄」「エッセイ集「不知火紀行」」「詩季まんだら」(上、下)など著書多数。近著に現代詩人文庫「岡田哲也集」。様々なところに詩評、随筆を執筆中。南日本文学賞受賞。平成4年度県芸術奨励賞受賞。

それに、勝とうたって、東京は台風の中心と同じく、相当の力を持っているものだ。それに勝つことなんて思わなくてもいいが、負けはしないぞ、と覚悟することが大事だ。

大海の一滴も水なら、井戸の一滴も同じ水である。日本のはずれにあること、小さいことを恥がしからず悪びれず、わが井戸を掘り続けることが、いずれこの世に通底すると思う。そうやって、感動は錦江湾を超えるのだ。それでポシャっても、いいではないか。

井戸と情は深く、目標は高い人が私は好きだ。私になにも精神論をおつていっているのではない。いい作品こそ全てと言っているのだ。

いい作品と言えば、やはり手はじめは、鹿児島の人という特産品ではないか。